

エージェンシーの育成を目指し真正な学びを実現する学習過程の在り方  
実践的推論プロセスと個別最適な学びを導入した家庭科住生活の実践を通して

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-03-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 二橋, 拓哉, 山崎, 瑠利子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/2000137">https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/2000137</a>

# エージェンシーの育成を目指し真正な学びを実現する学習過程の在り方

## 実践的推論プロセスと個別最適な学びを導入した家庭科住生活の実践を通して

ライフプランニング学科 二橋 拓哉  
町田市立南成瀬中学校 山崎瑠利子

**要旨：**本稿の目的は、エージェンシーの育成を目指し、真正な学びを実現する学習過程の在り方の提案することである。そのために、「家庭科の真正な学びを実現する学習の概念図」に依拠して、個別最適な学びを充実させ実践的推論プロセスに留意した家庭科住生活の実践を行い、その学習過程や生徒の学びを考察した。

実践した授業の過程は実践的推論プロセスによって構成され、これらは題材を貫く問いによって繋がれている。これは先行研究と比較して「何が問題かを丁寧に整理する」点で共通性がある。一方で、学習者が題材を貫く問いを自らの文脈に置き換え、個人や社会に変革を起こすために課題を設定する、という点に差異性がある。また、生徒の記述物をテキストマイニングによって分析した。その結果、生徒はきっかけ体験から解くべき課題を設定し、その解決のための方法を工夫したり、案を多角的に評価検討したりする中でエージェンシーとして実現可能な課題は何か特定したりする様が見て取れた。

**キーワード：**エージェンシー ラーニング・コンパス 実践的推論プロセス 個別最適な学び 協働的な学び

### 1. 背景

本稿の目的は、エージェンシーの育成を目指し、真正な学びを実現する学習過程の在り方の提案することである。用語の定義は以下の通りである。

**エージェンシー：**自分の人生および周りの世界に対して良い方向に影響を与える能力や意思を持つこと。本稿ではこうした能力や意志を持つ者。

**真正な学び：**オーセンティックな学び。教科の本質に即した学び。

中学校学習指導要領(平成29年告示)解説総則編によれば、「生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、社会構造や雇用環境は大きく、また急速に変化しており、予測が困難な時代となっている。また、急激な少子高齢化が進む中で成熟社会を迎えた我が国にあっては、一人一人が持続可能な社会の担い手として、その多様性を原動力とし、質的な豊かさを伴った個人と社会の成長につながる新たな価値を生み出していくことが期待される」。

最近では、この方策としての「ラーニング・コンパス」と持続可能な社会に変革できる力を有する人材としての「エージェンシー」の育成が注目されている

(図1)。OECD「Education 2030」では、教育の目標を「個人や社会のウェルビーイング」と位置付けた。ラーニング・コンパスは、児童・生徒が教師の指示を

The OECD Learning Compass 2030

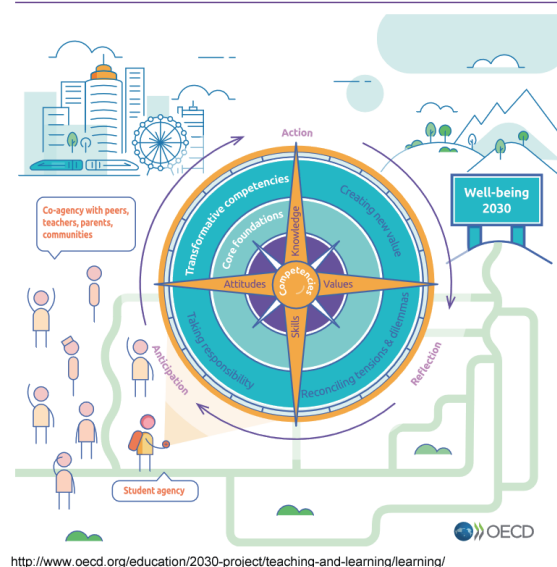


図1 OECDのラーニング・コンパス(学びの羅針盤)  
2030 OECD Learning Compass 2030  
仮訳より引用

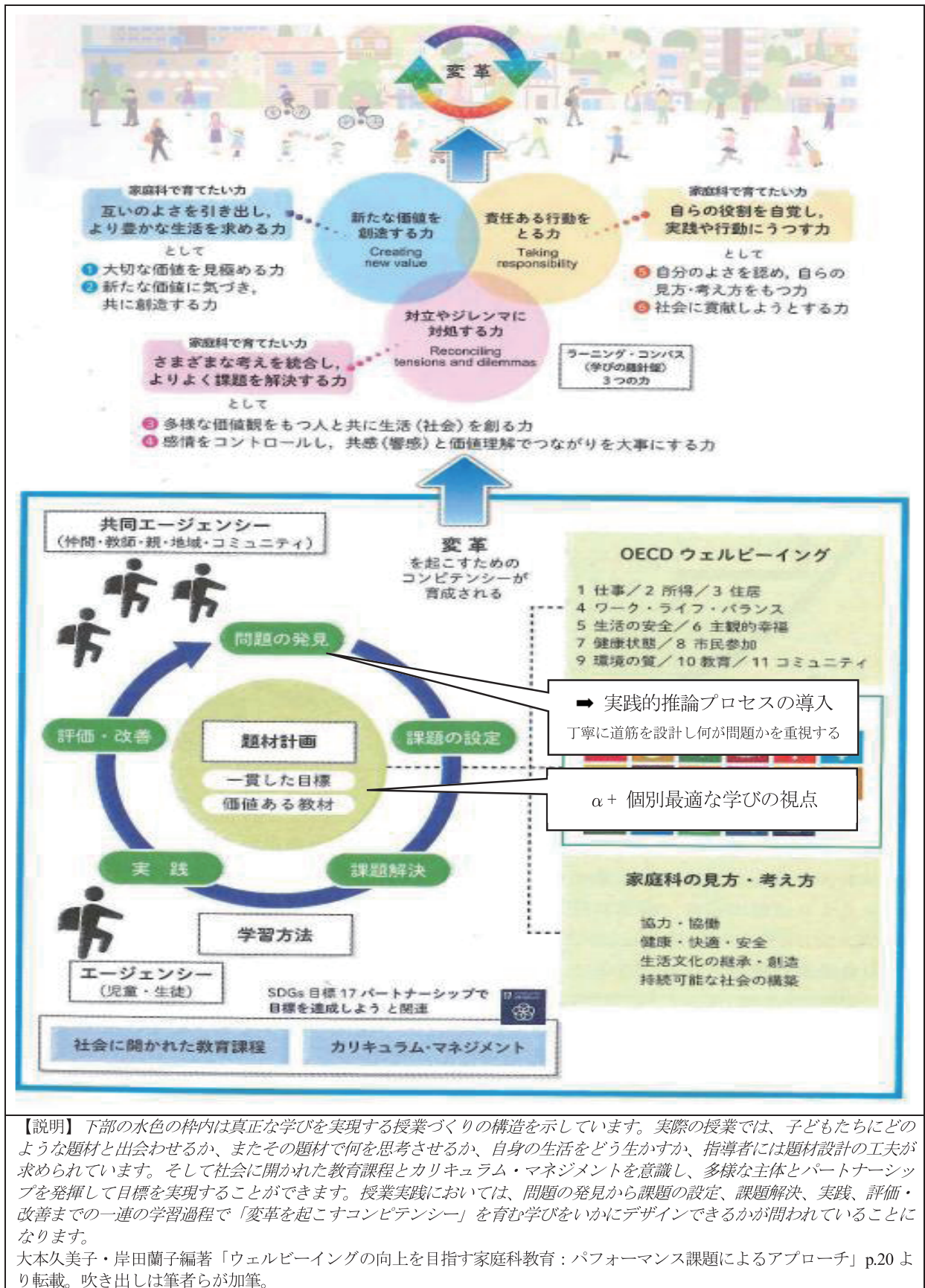


図2 家庭科の真正な学びを実現する学習の概念図と本研究の位置づけ

そのまま受け入れるのではなく、未知の環境の中、コンパスを駆使して自力で歩みを進め、責任意識を伴う方法で進むべき方向を見出す必要性を強調している(大本・岸田、2022)。

さらに、ラーニング・コンパスでは、「変革を起こす資質・能力 (Transformative competencies)」として次の3つを示した。

- ・新たな価値を創造する力 (Creating new value)
- ・対立やジレンマに対処する力 (Reconciling tensions and dilemmas)
- ・責任ある行動をとる能力 (Taking responsibility)

これらは知識・スキル・態度・価値に整理される。また学習は、学習者がウェルビーイングを目指すために見通し (Anticipation)、行動 (Action)、振り返り (Reflection)、のサイクルの中で、主体的に行われる。

大本・岸田 (2022) はグローバル社会の一員としての責任を自覚し、より良い未来の創造に向けた変革を起こすコンピテンシーを育成するためには、問題解決学習という方法に加え、一貫した目標と価値ある教材による題材計画が重要だと指摘し、家庭科の真正な学びイメージを図2の通り示した。後述する授業計画および実践は図2に依拠する。

さて、本研究の問いは、「エージェンシーの育成を目指し、真正な学びを実現する家庭科の学習過程はどうあるべきか」である。大本はこの点を①課題解決的な題材計画、②パフォーマンス課題による実践的な学習へのアプローチによって乗り越えようとしている。具体的には、パフォーマンス課題を中心にした課題解決的な学習を提案した。①課題解決的な題材計画は、課題設定、実践、評価・改善、新たな課題設定の繰り返しの中で行われ、これはいわゆる PDCA サイクルのことを指していると考えられる。

筆者らは、エージェンシーの育成を目指し真正な学びをより高次に実現するためには「個別最適な学び、協働的な学びを充実させ実践的推論プロセスに留意した学習過程」が重要だと考えた。個別最適な学び、協働的な学びに関する用語の定義は表1の通りである。筆者らがこのように考えた理由は次の通りである。

大本は「題材で重視したいこと」「パフォーマンス課題で重視したいこと」として次を示した。

**【題材で重視したいこと】**

- ・新たな価値を創造する力をイメージしてみよう。
- ・この題材で想定できる対立や矛盾はどんなことだろうか？

表1 個別最適な学び、協働的な学び

<p><b>個別最適な学び</b>: 児童生徒が自己調整しながら学習を進めていくことができるよう指導することであり、「指導の個別化」と「学習の個性化」に整理される。</p> <p><b>指導の個別化</b>: 教師が支援の必要な子供により重点的な指導を行うことなどで効果的な指導を実現することや、子供一人一人の特性や学習進度、学習到達度等に応じ、指導方法・教材や学習時間等の柔軟な提供・設定を行うこと。</p> <p><b>学習の個性化</b>: 幼児期からの様々な場を通じての体験活動から得た子供の興味・関心・キャリア形成の方向性等に応じ、探究において課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現を行う等、教師が子供一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することで、子供自身が学習が最適となるよう調整すること。</p> <p><b>協働的な学び</b>: 探究的な学習や体験活動などを通じ、子供同士で、あるいは地域の方々をはじめ多様な他者と協働しながら、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、様々な社会的な変化を乗り越え、持続可能な社会の創り手となることができるよう、必要な資質・能力を育成すること。</p>
---

文部科学省初等中等教育局教育課程課編「学習指導要領の趣旨の実現に向けた個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関する参考資料」pp. 7-9をもとに筆者らが作成

- ・この題材で考えられる責任ある行動とはどんなことだろうか？

**【パフォーマンス課題で重視したいこと】**

- ・学習者にとって切実性を考慮する。
- ・現代社会で求められる状況を考慮する。
- ・学問の本質を考慮する。

両者は生徒が問題解決的な学び、探求的な学びの中で自ら追究したいことを定めて、主体的に学習を遂行するという点で親和性がある。

一方で、図2では問題解決的な学習過程は、問題の発見、課題の設定、課題解決、実践、評価・改善、の5つの循環の中で成立していると示されている。筆者らはこれらの中でも特に課題の設定に留意すべきだと考えた。

綿引ら (2012) によると、家庭科における問題解決学習とは「デューイの反省的思考論を支えとしながら、子どもの関心からくる疑問を子ども自身が探求し、その過程で知識や技術を深く学ぶことを想定された学習」である。

荒井ら (2009) は、それ以前の問題解決学習はその具体的な学習方法や内容、さらに「何を問題とし」「どう解決するのか」の中身について十分に議論されていない事を指摘した。その上で、丁寧に道筋を設計し何が問題かを重視する実践的推論プロセスを提唱した。実践的推論プロセスは、①問題に気づく、②現状を把握する、③情報を収集する、④情報を多角的に検討する、⑤解くべき課題を設定する、⑥課題解決のための方法を工夫する、⑦案を多角的に評価検討する、⑧実行する計画を決定する、⑨実行する、⑩結果を振

り返る、の10つに大別される。

綿引ら(2012)は家庭科の問題解決学習は必ずしも問題解決のため「実行」するプロセスが含まれていないことを指摘した。その理由として、問題を他者との対話を通して多角的に考察するプロセスの中でも批判的リテラシー(荒井ほか2009)を育むことができるからだを考察した。

すなわち、本稿の実践は、図2の「学習方法」に対して、子供の興味・関心・キャリア形成の方向性等に応じて「何が問題か」を丁寧に追求していく学習過程にすることによって変革を起こすためのコンピテンシーの育成を目指す。

以上の課題意識から、本稿では個別最適な学び、協働的な学びを充実させ実践的推論プロセスに留意した家庭科の授業を実践した。また、生徒が粘り強く問いを探究しウェルビーイングを目指したか(エージェンシーとしての学びに向かう姿を見とる)という点から実践の成果と課題を考察した。

## 2. 授業の内容

### (1) 概要

実施期間 : 2023年9月~11月  
 実践校 : 東京都町田市立A中学校(以下「本校」)  
 実施場所 : 普通教室・校内駐車場ほか  
 対象 : 中学1年生133名  
 教科・内容 : 技術・家庭科(家庭分野) B衣食住の生活  
 題材名 : 今日よりちょっといい住生活

### (2) 題材の目標

生徒が「今の自分が始められる、住生活をちょっとよくするためにできること」を見出す。

### (3) 題材の指導計画と実践

授業の計画は表2の通りである。

第1時の目標は「住まいの働きと空間について理解する」である。学習過程は「①問題に気づく」と関連させた。授業で生徒は、「今までに学習した住まいに関することは何かあったか」思い出し、「今日よりちょっといい住生活」をテーマにマインドマップ(図3)を作成した。

第2~4時の学習過程は「②現状を把握する」「③情報を収集する」と関連させた。ここでは、生徒主体の探究に向けて知識の足場を作ることに留意した。

第2時の目標は「住まいの働きと空間について理解

する」である。授業で生徒は、住まいにおける生活行為を考える活動を通してなぜ住まいが必要なのか考えた。また、生活行為と空間の関連に気づいた。

第3時の目標は「安全な住まいで安心な暮らしについて考える」である。授業で生徒は、「ぐるっとハウス」を用いて家庭内事故が起こりえる箇所を探し、対策を考えた。また、東日本大震災の映像を視聴し、災害時に住居で起こることを知った。

第4時の目標は「持続可能な住生活について基礎的な理解をする」である。授業で生徒は、家庭内で使用するエネルギー、再生可能エネルギー、木材建築の特徴について理解した。

以上の学習の成果は、ポートフォリオの「学びの足あと」にまとめられた(図4)。この活動で教員は「第5時の最後で仮課題①を設定するために、本時の学びを通して『掘り深めてみたいこと』『疑問に思ったこと』をまとめなさい」と指示をした。したがって、生徒の振り返りは一定の視点に基づいて行われることになる。

第5時の目標は「きっかけ体験を通じて、向き合うべき問いを見出す」である。学習過程は「④情報を多角的に検討する」と関連させた。授業ではA:起震車による地震体験(図5)、B:ロボット掃除機(図6)を体験した。生徒らは体験を踏まえてクラスメイトや

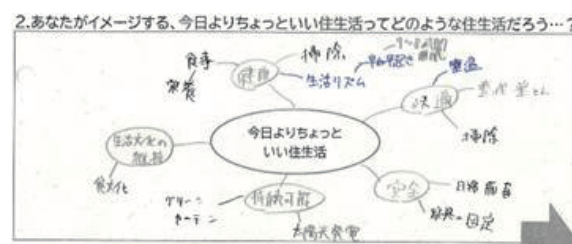


図3 生徒の作成したマインドマップ(第1時)

4. まなびの足あと		*新しく、知識として学んだことを記録しよう!
1	住まいの働きと住まいの空間	目標 住まいの基本的な機能を理解することができる。生活行為と空間の関わりがわかる。
住生活には機能的な役割と精神的な役割が必要。 住まいの中では個人生活の空間、家族生活の空間など様々な空間がある。 様式はいつの日か変わるのかな?と疑問に思った。 これはどうやって解決すればいいかな?		
2	安全な住まいで安心な暮らし	目標 家庭内の事故とその原因を理解し、安全を考えた住まい方を工夫することができる。
家庭内事故でなくとも人が住んでいる中で気をつけたいと思った。床に落ちたものが足元を刺さるということがある。床に落ちたものを掃除機で吸い取るといいかな?と疑問に思った。 これはどうやって解決すればいいかな?		
3	持続可能な住生活	目標 持続可能な社会の実現に向けて、さまざまな住まいと住まい方の工夫があることを知る。
家にリサイクル品を使ったり、カーペットは使わずに畳にした方がいいかな?と疑問に思った。木を使った家具は環境に優しいのかな?と疑問に思った。木を使った家具は環境に優しいのかな?と疑問に思った。 これはどうやって解決すればいいかな?		

5. きっかけ体験!

図4 学習内容を興味関心に基づいて再整理したポートフォリオ

表2 授業の展開

図2 学習方法	実践的推論プロセスの学習過程	時	○学習目標 ・ 学習活動	○指導の手だて
問題の 発見	①問題に気づく	1	○題材を貫く「問い」と出会い、学習に見通しを持つ ・「今までに学習した住まいに関することは何があったか」思い出す ・「今日よりちょっといい住生活」をテーマにマインドマップを作成する	○生徒間、生徒-教員間の対話を通じて、問いが多面性を持つことに気づく
	<b>題材を貫く「問い」：今日よりちょっといい住生活のために自分ができることはなにか？</b>			
	②現状を把握する ③情報を収集する	2	○住まいの働きと空間について理解する ・なぜ住まいが必要なのか考える ・住まいにおける生活行為を考え、住まいと空間の関連に気づく	○探求に向けて知識の足場を作る ○「ぐるっとハウス」を用いた問題の発見と課題の構想 ○震災の映像から第5時の「きっかけ体験」につなげる
		3	○安全な住まいで安心な暮らしについて考える ・家庭内事故が起こりえる箇所を探し、対策を考える ・東日本大震災の映像を視聴し、災害時に住居で起こることを知る	
		4	○持続可能な住生活について基礎的な理解をする ・家庭内で使用するエネルギーについて理解する ・再生可能エネルギーについて理解する ・木材建築の特徴について理解する	
④情報を多角的に検討する	5	○きっかけ体験を通じて、向き合うべき「問い」を見出す ・A 起震車による地震体験、B ロボット掃除機に分かれて体験する ・生徒間で思ったことや考えたことを共有する。 ・A・Bを入れ替えて体験する。	○地域のボランティアと一緒に考える ➡仮課題①を見出す	
課題の 設定	⑤解くべき課題を設定する	6	○考えを多角的・多面的に検討し、解くべき課題を設定する ・「今日よりちょっといい住生活」と現状(あまりよくない)を比較する ・「今日よりちょっといい住生活」を実現するために問題となることを考える ・「今日よりちょっといい住生活」を実現するために本当にとりくむべきことを考える	○オンライン先生に尋ねる ○生徒間・生徒-教員間で珠玉の質問に留意した問いかけ合うことで、本当に解くべき課題は何か特定する 珠玉の質問の3要素 1.相手がそう考えた理由を掘り深める 2.問いを通じて相手が気づいていないことに気づかせる 3.違う角度から考えさせる ➡仮課題②を設定する
課題解決	⑥課題解決のための方法を工夫する ⑦案を多角的に評価検討する	7	○取り組む課題の解決のための案を構想する ・探求の成果はポートフォリオに書き出す ・発表するために Google スライドでプレゼン資料を作成する ・クラスメイトとリハーサルをする	○学習を進める上での学習方略を提示したり、使用を促したりする ➡課題 例：調べる、話し合う、新たにうまれた疑問を書き出す
		8		
		9		
	⑧実行する計画を決定する	10	○題材を貫く「問い」に対する考えをまとめる ・探究の成果をプレゼンする【パフォーマンス課題】 テーマ:「今の自分が始められる 住生活をちょっと良くするためにできること」 ・題材を貫く問いに対する考えをまとめる 「今日よりちょっといい住生活のためにあなたが できることはなにか」	○プレゼンの質疑応答は「珠玉の質問」に留意させる ○理想の住生活ではなく、今、生徒自身が個人や社会によい変革を与える行為はなにか、という視点で書かせる
11				

地域のボランティアと対話をすることで思考を整理し、仮課題①を設定した。ここで、教員は第2～4時を通じて得られた知識ときっかけ体験を結び付けて考えるよう指導した。

第6時の目標は「考えを多角的・多面的に検討し、解くべき課題を設定する」である。学習過程は「⑤解

くべき課題を設定する」と関連させた。授業で生徒は、題材を貫く問いである「今日よりちょっといい住生活」と現状を比較した。そして、それを実現するために問題となることを考えた。さらに、それを実現するために今の自分が始められることは何か考えて仮課題②を設定した。これらの活動を行う際、荒井ら（2009）



図5 起震車による地震体験（きっかけ体験A）



図7 オンライン先生と対話をする生徒



図6 ロボット掃除機（きっかけ体験B）



図8 問いに対する考えをプレゼンする生徒

「実践的行為を促す教師の問い」や、二橋ら（2023）「考えを深める質問」を参考にした。生徒は生徒間、生徒－教員間で問いに留意した対話の中で仮課題を設定することになる。

第7～9時の目標は「取り組む課題の解決のための案を構想する」である。学習過程は「⑥課題解決のための方法を工夫する」「⑦案を多角的に評価検討する」と関連させた。授業で生徒は、第10～11時のパフォーマンス課題「今の自分が始められる住生活をちょっと良くするためにできることプレゼン」のための準備をした。その際の学習方略は二橋ら（2024）などを参考に「調べる」「クラスメイトや教員と話し合う」「オンライン先生（図7、他教科教員や団体職員などとビデオ会議システムで対話）」「新たにうまれた疑問を書き出す」「珠玉の質問に留意してお互いに問いかける」「司書教諭が用意した参考書籍を読む」を提示した。探求の過程で仮課題②を微調整し課題を設定する。生徒は、自らの学習が最適になるよう、学習方略を調整して進めることになる。

第10～11時の目標は「題材を貫く「問い」に対す

る考えをまとめる」である。学習過程は「⑧実行する計画を決定する」と関連させた。授業で生徒はテーマ「今の自分が始められる住生活をちょっと良くするためにできること」に則してプレゼンを実施した（図8）。第11時の最後に「今日よりちょっといい住生活のためにあなたができることは何ですか」と発問し、それに対する考えをポートフォリオに書かせた。

以上に述べた実践は、個別最適な学びを通して生徒が経験・体験の積み重ねの中で自らの学習を粘り強く調整し、「エージェンシーとして『自分』は何を追求し、何をすべきか」を探求できるよう設計した。この「自分」は、言い換えればそれぞれ多様な興味・関心・キャリア形成の方向性等を持つ存在である。また、「いま何をすべきか」は何度も仮課題を設定し直すことで新たな価値に気づいたり、自らの役割を自覚し、実践や行動に移したりする力が身につくことを企図した。すなわち、実践的推論プロセスと個別最適な学びを導入したことにより、社会に変革を起こすためのコンピテンシーが育成されるだろう授業が実践できた。この点を後述にて考察する。

### 3. 分析の方法

以上に記した実践において、生徒が粘り強く問いを

探求しウェルビーイングを目指したか（エージェンシーとしての学びに向かう姿を見とる）から、成果と課題を考察した。

そのために第11時の最後に発問した「今日よりちょっといい住生活のためにあなたができることは何ですか」に対する生徒の記述物を対象とした。なぜなら、このデータは生徒が自身の探求の成果をエージェンシーとして捉え直し、変革を起こすための行動が端的に表れているからである。これは生徒一人あたり平均125文字記述していた。

資料に対してテキストマイニング（Text Mining）を用いた分析を行った。テキストマイニングとは、文字列を対象とした分析方法のことである。通常の記事からなるデータを単語や文節で区切り、それらの出現の頻度を解析することで有用な情報を取り出すことができる（二橋、2019）。分析は、樋口（2004）（2020）を参考にKH Coder3を使用した。また、分析の手順は二橋ら（2021）などを参考にした。

まず、「思う」「考える」は頻出語であるものの、内容には直接影響しないと考えられたため分析対象から除外した。次に複合語を抽出した（方法：茶釜）。その中で出現数が15回以上の「住生活」「地震対策」「防災グッズ」を、KH Coder3で抽出できるように認識させた。このように、研究目的に沿うよう整えたテキストを使用して分析した。なお、後述する結果で自由記述を引用する際は斜体で、分析の中で着目する単語には下線を引き表記した。

#### 4. 結果と考察

##### (1) テキストマイニングの結果

KH Coder3によるテキストマイニングを行った結果、総抽出語数は9843（3920）、異なり語数は963（740）だった（括弧内は助動詞・助詞などを除きKH Coderが分析対象として認識している語の数）。総抽出語は、分析対象に含まれるすべての語の延べ数を指している。また、異なり語数とは、同一単語は何度出てきても一語とカウントし、分析対象の中で何種類の語が使用されているかを指している。

データの中で15回以上出現した語のリストを表3に示す。

次に、表3の内容を把握するために15回以上出現する単語について階層的クラスター分析（基準：Word、距離：Jaccard、クラスター数：AUTO）を実施した。これにより多様な記載が見られる分析対象から、語彙のつながりを定量的に検討することができ、客観的な

表3 頻出語リスト

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
対策	84	避難	21
今	80	良い	21
自分	69	いつ	20
家具	66	グッズ	20
地震	63	人	20
災害	58	家族	19
家	55	準備	19
買う	39	掃除	18
学ぶ	33	防犯	18
固定	33	プレゼン	17
使う	33	今回	17
学習	32	整頓	17
部屋	32	大切	17
地震対策	31	起きる	16
整理	29	発表	16
住生活	27	理由	16
安全	25	お金	15
快適	25	簡単	15
防災	25	配置	15
来る	25	防災グッズ	15
生活	24		

分析が可能になる。分析によって得られた樹形図を図9に示す。さらに、4つのクラスターに分類し、上から①、②、③、④とした。

##### (2) クラスターの命名

次に各クラスターがどのような内容なのか端的に示すために、各クラスターに出現している語が複数使用されている記載例を参考に、語のつながりを解釈しクラスター名をつけた。その際、斜線は引用を、下線は注目する語を示す。

①のクラスターを構成している語は「整理」「整頓」である。生徒の記述の例は次の通りである。

- ・*家の中を見回して見て、散らかっている場所はないか、壊れている場所はないかななどを調べてみて整理整頓することだと考えた。*
- ・(略) 私はマンションに住んでいるのでグリーンカーテンなどは出来ないのですが整理整頓は足場も出来て快適になるからです。

このように、①のクラスターは整理整頓に関する内容であるため、「整理整頓」と命名した。

②のクラスターを構成している語は「学習」「学ぶ」「部屋」「快適」「今回」「プレゼン」「理由」「掃除」である。生徒の記述の例は次の通りである。

- ・(略) 理由は●●さんがプレゼンしていた空き箱を使って収納するというアイデアを利用して快適かつ効率的に生活していけたらいいなと思ったからです。



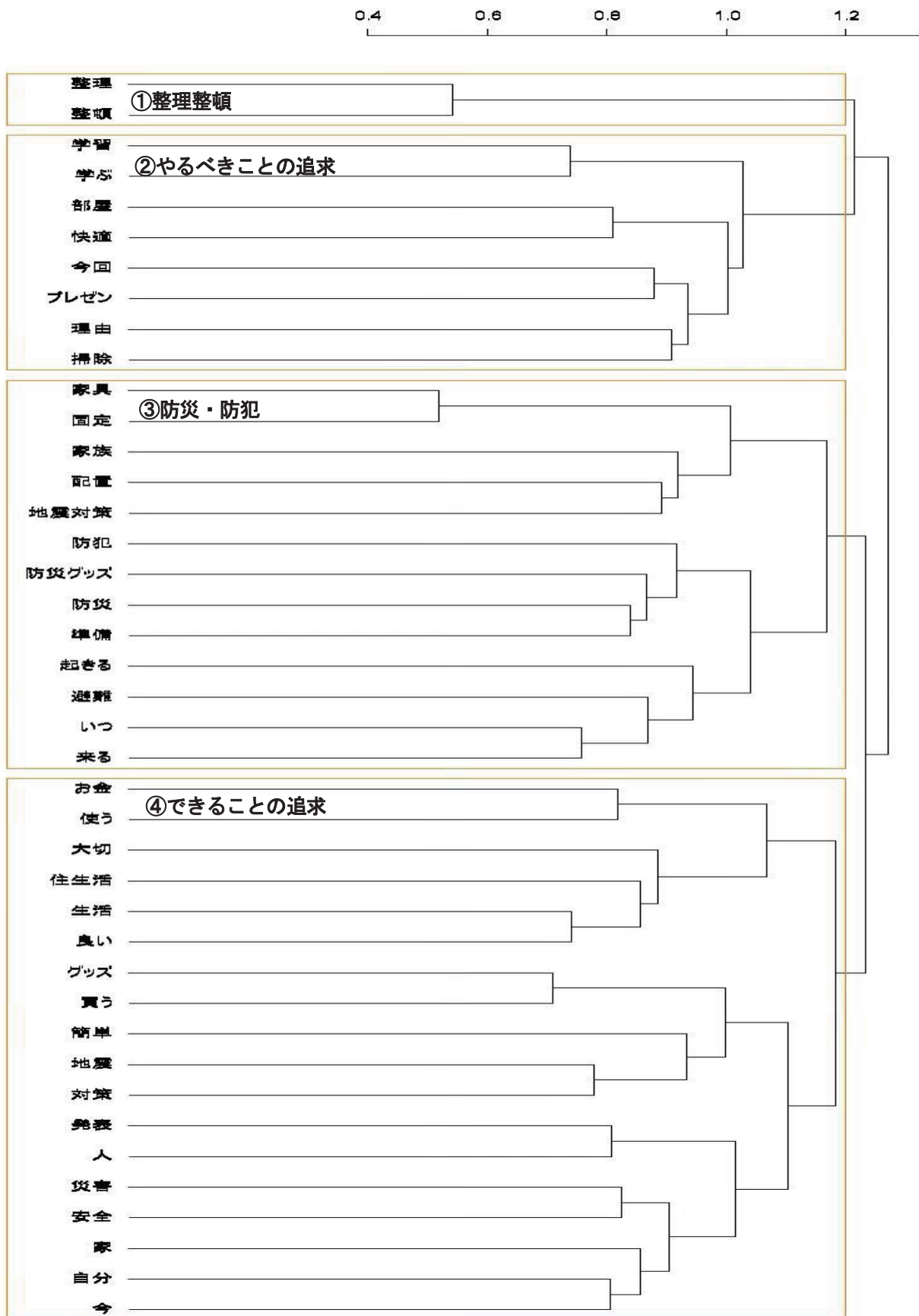


図9 階層的クラスター分析（「今日よりちょっといい住生活のためにあなたができることは何ですか」に対する回答）

この学習を通して、災害時に気をつけた方が良くことや、部屋で快適に過ごすために必要なことを学べました。これからも学び、知ることで終わるのではなく、実際にやってみるということを大切にしていきたいです。

- ・部屋の掃除を考えました。なぜならば快適に過ごすために部屋の片付け、収納について調べ学習したからです。なので今回学習したことを活かそうと思ったからです。

このように、②のクラスターは生徒がちょっといい住生活のために自分がすべきことは何か追求している内容であるため、「やるべきことの追求」と命名した。

③のクラスターを構成している語は「家具」「固定」「家族」「配置」「地震対策」「防犯」「防災グッズ」「防災」「準備」「起きる」「避難」「いつ」「来る」である。生徒の記述の例は次の通りである。

- ・今回、私が調べたのが防災対策なので、防災グッズを揃えたいと思う。それから、●●さんの発表からあった通り、30年以内に大きな地震が来るらしいので、家具を壁に沿って設置し、固定までしたい。
- ・一番足りないものは、防犯対策だと考える。自分の家の周りには街灯があまりなく、玄関先が暗いので泥棒が入りやすいと思う。その為に、人感センサーがついているライトを玄関に置こうと思う。しかも、このようなライトは100円ショップでも買えます。
- ・今できることは、地震などの自然対策に備えて避難する時の防災バッグの準備や、L字型器具で家庭の固定家具の配置などを考えたり準備することです。今回のみんなのプレゼンのように自然災害はいつ来るかわからないからその分の準備が必要だと思ったからです。

このように、③のクラスターは防災や防犯のための具体的な課題を見出す内容であるため、「**防災・防犯**」と命名した。

④のクラスターを構成している語は「お金」「使う」「大切」「住生活」「生活」「良い」「グッズ」「買う」「簡単」「地震」「対策」「発表」「人」「災害」「安全」「家」「自分」「今」である。生徒の記述の例は次の通りである。

- ・地震対策のために家具を固定したりしたり災害用バッグを作ることで、いつ災害が来ても安心して避難ができるからです。さらに家具を固定するためのグッズは百均で買えるなどお金もそれほど使わずに済みます。
- ・今からできるちょっといい住生活の工夫では、簡単

に安くても、安全に生活できて、100円でも対策できるため、まずは100円で対策して、良かったらもっと良い対策をとっていき、いい住生活にすることが良いと思った。

このように、④のクラスターは生徒がちょっといい住生活のために自分ができるとは何か追求している内容であるため、「**できることの追求**」と命名した。

### (3) データの文単位の集計結果と記述内容

実践した題材を通じて生徒がどのクラスターの内容にどの程度着目しているか明らかにするため、クラスターの語や意味内容を指標に自由記述を文単位で集計した。例えば、「家を整理整頓してちょっといい住生活ができると思いました」は①整理整頓に関連した一文であるため、「①」に“1”を計上した。また、一人の記述に複数のクラスターと関連する文があるときはそれぞれ分けて集計をした。例えば、「今できることは、家の中を見回してみて、散らかっている場所はないか、壊れている場所はないかなどを調べてみて整理整頓することだと考えた。なぜならば、この学習を通して、災害に備えるにしても、防犯対策をするにしても、家の中で快適に過ごせるようにするには、家のものを整理整頓したり、した上で防災用具や防犯用具を取り付けたりすることが大切だと学んだから」という自由記述は、第一文は①整理整頓と関連している。また、第二文は防犯や防災に関する記述があるため、③防災・防犯の課題と関連している。このような場合、“①”と“③”にそれぞれ“1”を計上する。それぞれのクラスターに関連する文の数を表4に示す。また、各クラスターの具体的な記述内容について以下に記す。

表4 クラスターに関連する文の数

クラスター	文の数
①整理整頓	28
②やるべきことの追求	32
③防災・防犯	118
④できることの追求	39
⑤その他	49
合計	266

#### ①整理整頓

クラスター①を支持する文の例を以下に記す。

- ・今できることは、家を日頃から整理整頓して急に来る地震などの自然災害や不審者がきたときに対応できるようにすることだと考えた。なぜなら、学習を通して家を整理整頓しておくと自然災害のときにもスムーズに避難できるし、不審者から逃げるときも部屋をきれいに整理整頓しておいたほうがいいこと

を学んだから。

- 今できることは、家の中を見回してみ、散らかっている場所はないか、壊れている場所はないかなどを調べてみて整理整頓することだと考えた。なぜならば、この学習を通して、災害に備えるにしても、防犯対策をするにしても、家の中で快適に過ごせるようにするには、家のものを整理整頓したり、した上で防災用具や防犯用具を取り付けたりすることが大切だと学んだから。
- 今できることは家の中をお金をかけずに整理整頓をすることができると思う。なぜなら、家の中をきれいにすることで事故や事件を防げと思ったから。これらの例からは整理整頓は③防災・防犯の課題意識に由来することが読み取れる。

#### ②やるべきことの追求

クラスター②を支持する文の例を以下に記す。

- 起震車体験に参加することはできませんでしたが、授業で東日本大震災の動画を見たことで、地震の恐ろしさを学び、地震が起きたときの対策が必要だと感じたからです。
- みんなの発表を聞いて、二次災害のことや地震、温暖化など今よりも不便にならないように対策したり、節約したり、良くしたりすることが大切だと思った。
- 安心に暮らすためには安全であることが第一条件だと思い、そのためには家のなかで危険所を色々な視点から見てみるのが大切だと思った。子供の視点と大人の視点では見え方が変わってくるのでいつどこでどんな人がいても安全にいられる空間を作っていくことがいいと思った。  
これらの例からは、きっかけ体験や動画の視聴、クラスメイトのプレゼンから、ちょっといい住生活に対する課題意識を見出している様子が読み取れる。

#### ③防災・防犯

クラスター③を支持する文の例を以下に記す。

- ハザードマップをもらって避難できるところを知る。なぜなら●●川が氾濫したときに避難できるところをたくさん知知っておくと安全を守れるから。
- L字金具を使えば家具の倒壊を防ぐことができるし、飛散防止フィルムを貼って窓ガラスのガラスが飛散することを防ぐことができることを学んだから。
- 強い地震が来た時に備えて家族や自分の命を守るために家具の配置や棚などの固定しておくなどの地震対策をしっかりとしておく。

- 一番足りないものは、防犯対策だと考える。自分の家の周りには街灯があまりなく、玄関先が暗いので泥棒が入りやすいと思う。その為に、人感センサーがついているライトを玄関に置こうと思う。

これらの例からはきっかけ体験などから見出した課題意識から出発して、家具の固定やハザードマップの確認、人感センサーがついているライトなどの解決策を見出していることが読み取れる。

#### ④できることの追求

クラスター④を支持する文の例を以下に記す。

- 「今日よりちょっといい住生活」にするためには、お金を使うものばかりではなく、今日から今すぐにできるもの多くて、自分でもできそうだった。食べ物を買うときに買い過ぎないようにすることや、防災対策はすぐできそうだと思った。
- 私には、L字型金具などを使って家具を固定したりすることはできないが、今回の学習を通して、金具や、突っ張り棒以外にも、家具の下に貼ったり、敷くだけで地震対策をできるものや、転倒防止器具を使わなくても、家具の配置を変えるだけで、地震による家具の転倒の心配を減らすことができるということを知り、今回の学習で学ぶことができた
- 今できることとしては、今日よりちょっと良い住生活を目指すために今、家で起きている事を解決できるようなアイデアをこのプレゼンから得ることができたので次は実践してみようということができると感じました。  
これらの例からは、一連の学習過程において生徒が「自分が今できること何か」を探求し、またそのアイデアをクラスメイトと共有した様子が読み取れる。なお、これらの例を探索する中で、課題解決の主体が他者である生徒がほとんどいなかった、言い換えれば生徒は問題を自分ごととして捉えている様子であったことを付記する。

#### ⑤その他

4つのクラスターのいずれにも当てはまらない文の例を以下に記す。

- 換気や団らんの時間を増やすなど健康面でも精神面でも少し工夫をすることで快適に過ごせて毎日の生活が充実したものになったと思った"
- 電気を使う量を減らすと環境問題の改善にも繋がります。涼しくするには音を使ったり、植物(観葉植物やグリーンカーテン等)を有効活用することで

電気を使わずに良い生活ができるようになってきました。

- ・今できることは、エアコンなどの節電だと考えた。なぜなら、学習を通して、一度でも温度を変えることや、服を着たり脱いだり、窓を開けたり、誰でもできるような簡単なことで、節電ができることを学んだから。

これらの例は、整理整頓や防災の様に単独でクラスターを形成するほどの頻出語で構成されていない。しかし、生徒が学習過程で防災（きっかけ体験 A：起震車）や整理整頓（きっかけ体験 B：ロボット掃除機）以外にも興味関心を広げ「今日よりちょっといい住生活」を目指して多様な解決策を構想した様子が見取れる。そして、これらの例でも生徒の中に通底して「自分が今できること何か」という意識がある。

## 5. まとめ

本稿の目的は、エージェンシーの育成を目指し、真正な学びを実現する学習過程の在り方の提案することである。そのために、大本・岸田（2022）「家庭科の真正な学びを実現する学習の概念図」に依拠して、個別最適な学びを充実させ実践的推論プロセスに留意した家庭科住生活の実践を行い、その学習過程や生徒の学びを考察した。

実践した授業の過程は、①問題に気づく、②現状を把握する、③情報を収集する、④情報を多角的に検討する、⑤解くべき課題を設定する、⑥課題解決のための方法を工夫する、⑦案を多角的に評価検討する、⑧実行する計画を決定する、から構成された。そして一連の学習過程は題材を貫く問いによって繋がれている。これは荒井ほか（2009）の実践的推論プロセスと「何が問題かを丁寧に整理する」点で共通性がある。一方で、きっかけ体験を通じて学習者が題材を貫く「問い」を自らの文脈に置き換え、そこに学習者自身が変革を起こすために課題を設定する、という点に差異性がある。

また、生徒の記述物はテキストマイニングを用いて定量的に分析し、それを手掛かりに文脈を考察すると以下のことが明らかになった。生徒はきっかけ体験から「自分のやるべきことはなにか」と仮課題を設定する。そして、課題解決のための方法を工夫したり、案を多角的に評価検討したりする中で防犯・防災や整理整頓などに課題意識を持つ。さらに、問題解決の過程では通底して「自分が今できること何か」という意識がある。「今日よりちょっといい住生活」のためにで

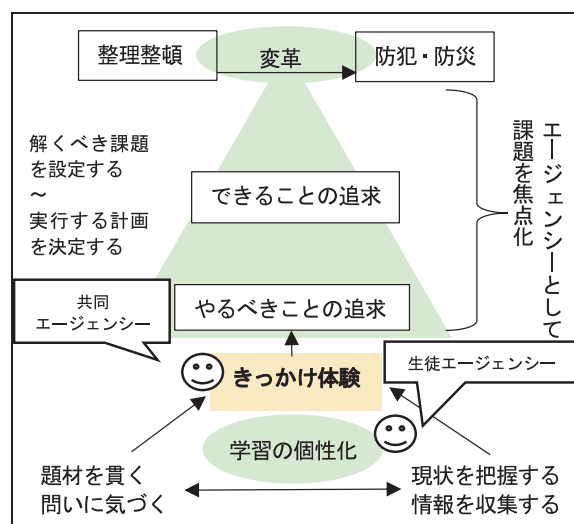


図 10 本実践の概念図（学習過程）

きることはたくさんあるが、エージェンシーとして中学生の自分ができるとは何かと考えていく中で、実現可能な案に集約されていく。

これらの結果をまとめたのが図 10 である。一連の指導計画の中で核となるのがきっかけ体験である。そこに至るまでの段階で、題材を貫く問いに則して現状を把握したり情報を収集したりするが、これらはきっかけ体験の事前学習に位置付けられる。生徒は事前学習を踏まえたきっかけ体験や、そこでの経験を生徒や教員、地域のボランティアなどの他者との対話の中で多角的・多面的に検討するプロセスを通してエージェンシーとしての自己がやるべきことを追求する。

そして、⑤解くべき課題を設定する、から⑧実行する計画を決定する、までの過程において、エージェンシーとして自分が今できることは何かと焦点化していく。こうしてできることを追求した結果、「整理整頓」や「防犯・防災」など自分が達成可能で、かつ個人や社会によい変革を与えられる課題を見出す。

本稿の成果はウェルビーイングのためのエージェンシーの育成を目指す学習過程の在り方と、それに対応する授業の例を提案できたことである。

## 6. 今後の課題

今後の課題は次の 2 つである。まず、本稿では、きっかけ体験として「防犯・防災」と「整理整頓」の 2 つを設定した。その結果、生徒の課題意識はこれらに向き、特に防犯・防災に偏った。今後、きっかけ体験の種類を増やしたり変更したりすることで学習の個性化に留意した授業改善をしたい。

次に、中学校技術・家庭科（家庭分野）における住

生活の学習事項は「家族の生活と住空間との関わりが分かり、住居の基本的な機能について理解すること」とか「家族の安全を考えた住空間の整え方について考え、工夫すること」とか書かれており、問題解決に家族の視点を入れることが求められる。しかし、生徒の記述を分析しても家族の視点を踏まえて「ちょっといい住生活」を探求できたのか判然としなかった。そこで、指導計画の第1時で住空間と家族の関わり方を強調したり、プレゼンの条件として「家族の視点でも考える」を入れたりするなどの改善をしたい。

#### 付記

本稿で掲載した生徒の著作物及び写真は、個人が特定されないように加工した上で、掲載の許可を得た。図2は原著者より転載および改変の許可を得た。

#### 謝辞

本研究は、「住総研 住教育授業づくり助成」の支援を受けて実施しました。お礼申し上げます（タイトル：防災に焦点を当てた今よりもちょっといい住生活、代表者：山崎瑠利子）。

#### 引用文献

荒井紀子・鈴木真由子・綿引伴子. (2009). 新しい問題解決学習：Plan Do See から批判的リテラシーの学びへ. 教育図書

樋口耕一. (2004). テキスト型データの計量的分析：2つのアプローチの峻別と統合. 理論と方法、数理社会学会、19 (1)、101-115.

樋口耕一. (2020). 社会調査のための計量テキスト分析：内容分析の継承と発展を目指して. ナカニシヤ出版.

文部科学省. (2018). 中学校学習指導要領解説（平成29年告示）総則編. 東山書房

文部科学省初等中等教育局教育課程課. 学習指導要領の趣旨の実現に向けた個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関する参考資料. pp. 7-9

二橋拓哉. (2019). 中学校家庭科における高齢者学習の変遷と今後の課題:中学校家庭科学習指導要領解説と中学校家庭科教科書の記述分析から. 日本家庭科教育学会誌、61 (4)、215-224.

二橋拓哉, 山崎瑠利子, 坂詰悦子, 大木真理奈, 結城遥. (2020). 中学校家庭科高齢者学習の実践：問題解決学習を手法として. 日本家庭科教育学会誌、63 (4)、203-214

二橋拓哉・藤澤世志彬・渡津光司. (2023). エネルギー変換の技術の学習における「形成的省察」を取り入れた「課題の設定」の授業改善. 一般社団法人日本産業技術教育学会実践事例集「テクノロジーとエンジニアリングの教室」第2巻 2022、11-18.

二橋拓哉・山崎瑠利子・坂詰悦子. (2024). 中学校家庭科における個別最適な学び、協働的な学びを視点にした試行的実践. 大阪樟蔭女子大学研究紀要、14. pp. 202-209.

OECD ラーニング・コンパス（学びの羅針盤）2030 (chrome-extension://efaidnbmninnnibpcajpglclefndmkaj/https://www.oecd.org/education/2030-project/teaching-and-learning/learning/learning-compass-2030/OECD\_LEARNING\_COMPASS\_2030\_Concept\_note\_Japanese.pdf) (2023.12.22 アクセス)

大本久美子・岸田蘭子. (2022). ウェルビーイングの向上を目指す家庭科教育. 大修館書店

綿引 伴子・中田 淳平. (2012). 家庭科の家族学習における問題解決学習の分析：実践的推論プロセスを手がかりに. 金沢大学人間社会学域学校教育学類紀要 (4). 57-70